

第二章 石器時代の郷土

第一節 人の住みはじめ

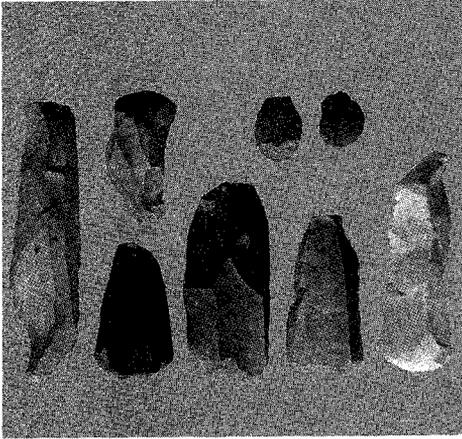
第二節 縄文時代

第三節 弥生時代

第四節 古墳文化

第二章 石器時代の郷土

第一節 人の住みはじめ



新庄市東山出土旧石器

わが舟形町の地方にはじめて人が住みつくようになったのはいつごろであろうか。

昭和三十七年、新庄市横前の赤土の中から一片の石器が発見された。硬い頁岩を打ちかいて作った縦長の石刃である。調査の結果、この石器はいまから三万年乃至一万五千年前の大昔の人々が使ったことが明らかになった。その後の調査で、この種の石器は東山野球場の上手や山屋・梨の木附近、また最近の調査によれば、新庄市南野あたりからも出土することが確かめられている。

舟形町内では、まだ本格的な調査は行われていないが、小国川の左岸の高い段丘、高倉山から同じ形式の石器が多数発見されて

いる。現在の研究では、これらの石器を用いた人々がこの地方の最古の住民と考えられている。

後期旧石器時代とよばれるこの段階においては、人々はまだ土器を作ることも、弓矢を使うことも知らなかった。頁岩や黒耀石などの硬い石を打ちかいて作った石器や、木の道具を用いて、野山の動物を追ったり、川に飛来する鳥を獲ったりして食糧としていた。もちろん、稲作はまだ日本に伝わっていない。木の実、草の根、野山の動物、川に登ってくる魚が、彼等の重要な食糧であった。獲った動物の皮を剥いだり、肉を切ったりするのが、前記の石器で、これにはナイフ型石器・石刃・搔器・彫刻刀・尖頭器などの別があった。

万を越す大昔のことであるから、もちろん詳しいことはわからないが、当時の人々は地面に穴を掘って柱をたて、上に笹や萱で屋根をかけて住居としていたことと思われる。この家の近くに石を敷きつめた炉をつくり、ここで獲ってきた動物の肉を焼いたり、木の実を蒸したりして食べたことであろう。いわばバーベキューの料理である。これを容器に入れて煮たり、炊いたりするのは、次の時代に代って土器が発明されて以後のことである。

ナイフ型石器・搔器・彫刻刀などが盛んに使われる段階の次には、細石刃の使用される段階があるが、町内からはまだ発見されていない。

これら石器の出土の層は、大昔洪積世の火山の爆発によって降り積った地層であるという。しかし、この地方



高倉山遺跡（富田）の旧石器

のどの火山の墳出物であるかは明らかでない。また、この頃の人々と次の縄文時代の人々との人種的な関係についても不明な点が多い。

山野にすんでいた動物の類にしても、縄文時代とは違い、ナウマン象やオツノシカなどの大型のものが多かったようである。

第二節 縄文時代

やがて、人々は土器をつくり、弓矢を使うことを知った。いまから約一万年前ごろと考えられる。弓矢の使用によつて、人々は従来に比べ飛躍的に多くの獲物をとることが出来るようになった。

土器にはやがて縄目の文様がつけられた。縄文土器とよばれる土器がこれであり、この土器によつて特色づけられる時代を縄文時代とよんでいる。縄文時代は八千年の長期にわたるが、普通これを草創期・早期・前期・中期・後期・晩期の六段階に分けている。

当時の人々は、川に沿う段丘や、南向きの日当たりのよい台地に竪穴式の住居を構え、数戸乃至数十戸の村を成して住んでいた。村は獲物の有無によつて、あるいは季節によつて、しばしば方々に移転したようである。人々の生活の基盤は、依然として狩と漁であり、草木の実や根を採集することにあつた。

この時代の遺跡として、とくに注目されるのは、次の遺跡である。



大畑山出土石器

1 大畑山遺跡

この遺跡は松橋から大石田町次年子に越す大畑山の東麓、標高三〇〇メートルのところに位置する遺跡である。昭和四十二年、山形大学によって調査され、縄文時代早期に属する多数の土器と五つの住居跡が発見された。ま

た、石鏃・石斧・石匙・石錘・石槍・石べらなどの石器類も多数出土している（『山形県史』考古資料による。）

2 平林遺跡

陸羽東線長沢駅北西、小国川右岸の台地上に広がる遺跡で、縄文時代中期および後期の遺跡である。この遺跡はかなり大規模な遺跡で、広範囲にわたって多くの土器片・石鏃・石錘・石匙・石皿・摺石・打製および磨製の石斧が発見されている。昭和四十七年ごろ、この地区の開田工事が行われたときに、地下約七〇センチのところの家屋の土台石ほどの大きさの河原石がびっしりと敷きつめられた遺構が発見されたが、精査の機会もなく破壊されてしまった。同時に粗製（素縄文）の深鉢型土器

(高さ三七センチ)が垂直に埋められた状態で発掘された。いわゆる埋甕の類と考えられるが、内部から小さな三角土製品が出てきたことが注目される。

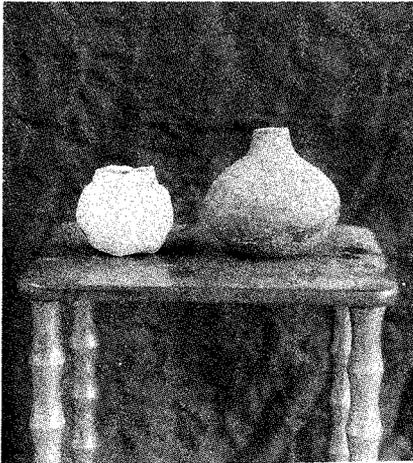
この遺跡附近から出土した岩偶は(当時長沢駐在所、菅原さん所蔵)拳大の丸い軽石に複雑な曲線文様を刻み込んだもので、この地方では珍しい遺物である。文様からみて縄文晩期大洞Ⅰの段階に比定される。岩偶は土偶などと同じく、呪術あるいはお守りとして用いられたものと考えられている。

3 荷渡遺跡

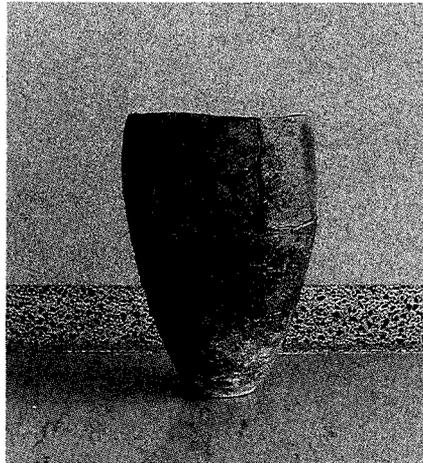
富田と堀内のほぼ中間字根渡し、やや小高い丘の上に位置する遺跡で、縄文時代前期(大木5式)の土器片・石錘・石匙・石べら・石斧などを出土する。

4 馬形遺跡

最上川の右岸、馬形部落のほぼ中央にあり、厚手のやや特殊な



長沢目(平林附近)出土の土器



平林(長沢・内山)出土の縄文土器(深鉢)

土器片を出土する。土器片は、中期のいわゆる同筒上層式に比定される如くで、前期・中期の時代、岩手・青森を中心として栄えた文化が、この地方まで及んでいる様子がうかがわれ、今後の調査に期待したい。

5 その他の遺跡

この外、『山形県史』考古資料には、紫山遺跡（前期・擦切磨製石斧出土）・長者原（中期大木8A）・福寿野（同）・沖ノ原（中期8A・晩期）・堀内（州崎、中期・後期・晩期、石鏃・石匙・石棒・凹石・環状石斧出土）などの諸遺跡が記されている。

また、昭和五十二年に長者原の手前、道路の北側の田圃の中にある糠壇ぬかがこわされたが、この折に大型の打製石斧が発見され、教育委員会に保管されている。

最近、経壇原南の段丘、ニワトリ権現の附近からも、晩期の土器片が発見されている。

経壇原の小国川に面した段丘からも前期・中期・晩期の各土器が出土し、住居跡等もあつたが開田のため、その跡も破壊されてしまった。又同地からは各種の矢じりも出土している。

この時代の遺跡の分布をみると、その殆どが小国川や最上川の段丘上にあり、そこからは石鏃・石匙・石皿などとともに石錘が出土することが注目される。石錘は平たい礫の両端に刻み目をつけたもので、網の錘りに用いられたものである。中には、長径一五センチを越すものもある。このように大きいものは石錘とは認め難いと



野田（幅）出土の土器



土偶 (福寿野出土)

長者原にあった糖壇かき

の説もあるが、出土遺跡の立地などからして、やはり石錘ではなからうかと思われる。

このような石のおもりをつけた網で、縄文人はどのような魚をとったのであろうか。いまも小国川に溯ってくる魚の種類が多いが、食料という点からみて注目されるのは鮭と鱒である。小国川の鮭はいまでもこの地方の名産の一つであるが、大昔においては、溯上する鮭の数は、いまと比較にならないほど豊かであったに違いない。この地方の人々は、これを獲って、重要な食糧源としたことも確かなことであろう。

縄文時代においては、東北日本と西南日本との文化の間に大きな差異があるが、これは両者の生活の基盤である食糧の違いに由来するものであろうとの論がある。東北日本では鮭や鱒がふんだんに獲れるのに対し、西南日本ではどんぐり等の木の実が豊富であるというのである。この「サケマス文化論」は次第に発展して、いまでは縄文晩期のあの絢爛たる亀ヶ岡文化は、鮭・鱒のもたらしたものではなからうかという論にまで至っている。

たしかに、この時代、東北地方、とくにその北半は、最も高度な文化を開花させた。また、この地方が鮭に恵まれていることも事実である。秋田県矢島地方や雄勝地方には、大きな石に魚を刻んだ「鮭石」がある。鮭を重要な食糧とする縄文人が、その豊魚を祈って、このような姿を刻んだのかも知れない。



真室川町釜淵出土土偶
(正源寺所蔵・重文)

舟形町からも、以前このような「鮭石」が発見され、舟形中学校に蔵されていたというが、いまは所在が明らかでない。

最上地方では鮭のことを「ヨー」とか、「鮭のヨー」という。「ヨー」の発音を注意して聞くと「イオ」とも聞える。つまり、「ヨー」は「ウオ」であり、いつかの昔にあつては、魚一般を指す言葉ではなかつたかと考えられるのである。

また、この地方では、旧の十一月十五日（または二十日のエビス溝の晩）には、鮭の大助・小助が眷族を率いて、「鮭の大助いま登る。」と呼びながら溯上する。この声を聞いた人は三日と生きられないから、この日は決して川端に行つてはならないという。鮭の築を設けている人も、この日は築を休み、一晚中酒を飲んでにぎやかに過ごし、大助の声を聞かぬようにしているとも言っている。

この外、鮭を蔵魚としている例や、神様に供える魚としている例も多い（真室川町大沢お大日様など）。これらことは、鮭は他の魚と違って、大昔から特別に扱われてきたことを示している。人々にとつての重要な食糧源というところから、このような習俗が生まれたものであろうか。

第三節 弥生時代

東北地方に縄文晩期終末の文化が栄えていた頃、西日本には新しい文化が伝えられ、急速に東に進みつつあった。新しい文化とは弥生文化のことで、これは紀元前三〇〇年ごろ、稲作を伴って、朝鮮から北九州にもたらされた文化である。

弥生文化の第一の特色は稲作を伴っていることである。また、銅剣・銅鉾・銅鐸などの青銅器や鉄鎌、さらに木製農具をつくるための工具などの鉄器をも伴っていた。反面、田んぼの土を掘り起こすのに用いられた石鍬・環状石斧、稔った稲の穂首を摘みとる石庖丁、木を削るのに使われた柱状片刃石斧などの石器も使用された。

この時代の土器は、縄文時代の土器と異って、薄手で赤褐色を呈し、種類は壺・甕かめ・坏などに限られ、器形も文様も著しく単純化してくる。

この時代の稲作は、湿田に直播の方法であったといわれる。このために弥生時代の村は低地に位置するものが多い。人々の住まいは一般的には縄文時代と同じく竪穴式であるが、稲穂を貯える倉庫は高床式であった。



最上町黒沢出土石鍬



弥生式土器・大蔵村上竹野出土

稲作は人々の生活を大きく変えた。野山のけものを追って生活した縄文時代と違って、稲作は十分に注意して管理さえすれば、秋には間違いない、豊かな稔りを得ることが出来る。これによって、人々の生活はずい分と安定するようになった。人々は水の便のよい平地に定住し、大きな村をつくるようになった。

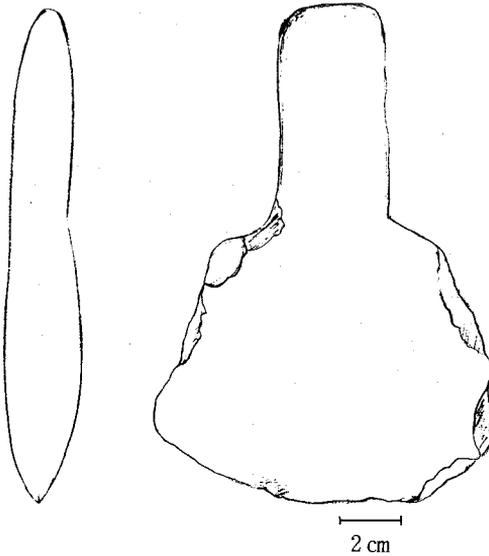
また、稲作による生産力は、縄文時代に較べ著しく高いので、必ずしもすべての人々が平等に働かなくともよいようになった。村の中で有力なものは、ますます多くの土地をもち、他の人々を従えて耕作させるようになった。こうして、次第に村の首長とこれに支配される人々が分かれるようになり、小さな国がつくられるようになった。

最上地方では、いつごろから稲が作られるようになったのであろうか。これを証拠づける確たる遺物はまだ発見されていないが、大蔵村上竹野遺跡から出土した瓢形土器や、真室川町木の下から発見された太い沈線紋をもつ土器などは、この時代の古いものと考えられる。上竹野出土土器は、小型の鉢形土器・瓢形土器が特徴的であるが、まだ一面に縄文が施され、これに太い曲線の沈線を加え、その外側の縄文を擦り消している土器である。この種の土器は福島県田村郡棚倉遺跡から多数出土しているので、棚倉式の名でよばれており、福島県では初期の水稲文化であることが確められている。

上竹野遺跡からは、この外に縄文時代末期の土器(大洞A およびA')や弥生時代中期のもの(福浦島下層式)が出土しているので、この地方に稲が入ってきたのは約二千年前



紫山出土石鍬



ごろと考えてよいのかも知れない。しかし、この遺跡からは、まだ粃の圧痕や石庖丁などは発見されず、併出の石器も石鍬・石匙・石斧など、依然として縄文文化に伴うものが多い。このことは、この地方によりやく入りかけた稲作が気候の寒冷のためか、または他の理由によって、充分に発達しなかったことを物語っている。あるいは、縄文文化の伝統が余りにも強かったために、新しい文化が順調に育たなかったことを物語るものであろうか。最近、紫山から右の石鍬が発見された。本町の弥生文化を物語る貴重な資料である。

ともかく最上地方の弥生時代の遺跡は、県内の他の地区に比らば、極端に少なく、また稲作を土台としてつくられたと考えられる古墳も、まだ確たるものは発見されていない。

弥生時代の遺物と考えられる石鍬・環状石斧・アメリカ型石鏃等の郡内における出土例は次のようである。

- ・石鍬 舟形町紫山・最上町立小路
- ・環状石斧 鮭川村上大淵・真室川町釜淵・大蔵村上竹野
- ・アメリカ型石鏃 大蔵村上竹野・戸沢村野口
- ・紡錘車 大蔵村上竹野

第四節 古墳文化

西日本においては、すでに弥生時代の半ごろから各地に小国家が成立したが、これが次第に強力な国に併合され、やがて統一政権が現われるようになる。この頃、国の王が死ぬと、人々は大きな墓を築いて、その遺骸を葬った。この墓は古墳と呼ばれるが、古墳によって特色づけられる四乃至六世紀の時代を古墳時代としている。

東北地方では仙台平野や会津盆地に巨大な前方後円墳がみられるが、県内においても最近大型の前方後円墳南陽市稲荷森古墳が発見された。しかし、他の古墳は、それほど大きなものや、時代の古いものはなく、しかもその分布が置賜・村山の二地方に集中している。このうち、やや古いものは山形市菅沢古墳や上市市土矢倉古墳・

衛守塚古墳、これより下つて東根市大塚古墳・鶴岡市大山菱津古墳などがあるが、他の大部分は終末期の群集墳である。

最上郡内では新庄市東山にあつたといひ、そこから出土したという土器（須恵器・高坏）や金環・管玉などがあるが、疑問の点が多く、今後の研究にまつより外にない。また、最近鮭川村豊田地区薬師長根にある土盛が前方後円墳ではないかとの説も出されているが、なお正確な発掘調査を必要とするように思われる。

しかし、古墳の存在が確認されないからといつて、この時代、最上地方に人が住んでいなかったということではない。この時代のもつと考えられる土器が各地から発見されている。この時代の土器は、弥生式土器の系統をひく土師器と呼ばれる赤みがかつた土器であるが、新庄市土内・泉田住遷からは、このやや古式のもつが出土している。

さらに古墳時代後期には、大陸から土器を焼く新しい技術が入つてきた。傾斜地に竈を築き、高い温度で焼く技法である。これによつて焼かれた土器は非常に硬く、ねずみ色を呈し、須恵器と呼ばれる。須恵器の出土地としては、新庄市東山・本合海・宮野・戸沢村出舟・鮭川村上大淵などが挙げられる。本合海に近い八幡原には、須恵器の一片には麦の実とみられるものつ圧痕がある。しかし、これらはいずれも時代が下がり、平安時代のもつのではないかと思われる。